

せんだいのスポーツむかし話

仙台藩の武道とスポーツ② 仙台藩の弓術

仙台市博物館 学芸企画室 小田嶋 なつみ

第3回

武士と弓術

武芸が「弓馬の道」ともいわれるように、弓術は武士にとって身につけるべき重要な技術のひとつでした。

広く使われている慣用語で実は弓術がもとになっているものに「手の内を明かす」というものがあります。これは、弓を持つ左手（弓手）の手のひらにあるマメをみれば、流派や技量を推し量ることができたことに由来するといわれています。武士の間で使われたがゆえに次第に広く用いられるようになった言葉といえるでしょう。

仙台藩での流派の広がり

仙台藩二代藩主の伊達忠宗は、鉄砲や馬術を得意としたほか、弓術においても、日置流という室町時代に日置弾正政次が確立したとされる流派の秘伝を受けていたといえます。以来、仙台藩では多くの武士が日置流を学びました。

四代藩主・伊達綱村の時には、紀州（現和歌山県）徳川家の弓術師範であった平塚靨右衛門重次を召し抱えたことで、雪荷流が仙台へ伝わりました。靨右衛門は、片平丁にあった「堂形」（弓術練習所）の設計にも携わり、仙台藩

の弓術の発展に尽力しました。江戸時代後期には、藩校である養賢堂の教科としても雪荷流が採用されています。

なお仙台藩には、日置流・雪荷流のほかにも弓術の流派が伝えられました。江戸時代後期につくられた仙台藩における武芸の流派の記録によると、領内には十二もの弓術の流派があったようです。

伊達家伝来の弓の道具

仙台藩主であった伊達家には、弓に関するさまざまな道具が伝来しています。その一つに靨（ゆが）があります。靨は、

弓を引く際にはめる鹿革製の手袋で、特に右手の親指を守るように作られています。靨にはいくつ種類があり、歩射や騎射、堂射など射法に応じて形が異なります。写真の靨は、騎射の際に用いる騎射靨という種類のもので、手綱を握りやすいよう、柔らかい作りとなっているのが特徴です。手の甲の部分にはそれぞれ

れ伊達家の紋が白抜きであしらわれています。

また、伊達家には、さまざまな種類の矢羽根も伝わっています。矢羽根とは、矢の上端に取り付ける鳥の羽根で、矢がよく飛ぶように、また飛ぶ方向を安定させるために付けられます。特に鷺の羽根などは、高級品として大名の間で贈答品に用いられました。写真の矢羽根も、贈答用として仕立てられたもので、「真鳥羽」と呼ばれる鷺の尾羽だけでなく、珍しい青鷺や山鳥などの羽根が、金や紺の台紙に装飾用の色糸で留められています。ほかにも、矢羽根を特産物としていた松前藩から贈られたものや、数本で束ねられたものなど、六百本を超える矢羽根が伊達家に伝来し、四段の箱の中に収められています。

こうした道具から、弓術を重視した伊達家の武家文化の一端をうかがい知ることが出来ます。



靨 江戸時代 仙台市博物館蔵



矢羽根 江戸時代後期 仙台市博物館蔵

仙台市博物館ホームページのお知らせ

おうちで楽しむ展覧会

博物館の企画をご自宅でご覧いただけるよう、博物館ホームページにおいて、常設展における展示作品の一部を、その見どころとともにご紹介しています。時代を超えてもあせない、その魅力を感じていただけたら幸いです。

おうちで楽しむ 企画展 「仙台の美と出会う」

おうちで楽しむ 常設展 重要文化財指定記念「伊達家文書と藩主の印章」



博物館ホームページ「おうちで楽しむ展覧会」のURLはこちらです → https://www.city.sendai.jp/museum/tenji/ouchitenrankai_top.html

仙台市博物館
SENDAI CITY MUSEUM

5月19日(火)から開館し、常設展を開催しております。最新の情報は博物館のホームページ・ツイッターなどをご覧ください。

▶博物館ホームページ <https://www.city.sendai.jp/museum/> または 仙台市博物館 検索
▶博物館ツイッター @sendai_shihaku 〒980-0862 仙台市青葉区川内26番地(仙台城三の丸跡) Tel:022-225-3074